# はじめに1

国公立大・私立大の標準的な難易度でしかも良質な文章と設問を素材にした講座を編成しました。記述・選択肢・傍線部説明・空欄補充・知識モノなどバランスよく設問を選んでいます。また、既存のアーカイブ講座ではあまり扱っていない、**〈小説や随筆の記述問題〉**も一つ入れました。センター試験でおなじみの小説ですが、国公立大・私立大でも意外によく出題されるため、このタイミングで取り組んでおきましょう。なお、論説・評論の筆者は、それぞれの学問分野を代表し入試にも頻出という、いわゆる「学界のアイドル」ばかりです。読書的な価値の高い文章ばかりということです。

**【このライブ講座からはじめて小柴大輔担当の現代文を受講する生徒さんへ】**
論説も小説もすべての文章に対して**「対比（比較）」**注目するという、現代文読解と解答の方法を提唱しています。わかりやすく解説するよう努めてまいりますが、いきなりライブ参加の前に、アーカイブの何らかの講座をちょっと見ておくことをおススメします。**『センター対策講座』『スタンダードレベル現代文』『トップ&ハイレベル現代文』『高1・高2現代文**（「高1高2」という講座名ですが採用している問題はすべて入試問題です）』いずれの講座でもかまいません、第一講を視聴してウォームアップしておきましょう。ライブ講座を最大限実りあるものにしましょう。ライブ講座の後、アーカイブの続きを視聴し、入試用の現代文対策の学習習慣を定着させましょう。

# はじめに2

## 過去のライブ授業にて、よくある質問

質問１：「現代文の知識事項、たとえば漢字や語彙の対策もするべきですか」
回答：するべきです！　センターであれ、国公立大・私立大の個別入試であれ、無視できない配点です。また論説・評論において問われる漢字は、重要概念であることが多く、文章理解とも直結しています。

質問２：「知識事項の勉強はどう進めたらよいですか」
回答：『**現代文〈重要語句・知識編〉**』という講座があります。テキストだけでもダウンロードしましょう。漢字・慣用句・口語文法・四字熟語・文学史さらに接続語の空欄補充問題もたっぷり練習できます。さらに文学史については『**早大現代文**』のテキストも参照してください。

なお市販の書籍としては、小柴大輔著『**読み解くための現代文単語**』（文英堂）があります。評論用語と小説用語の両方をカバーし、イラストも二〇〇カット！　また、評論と小説の読み方と解き方のコンパクトな総まとめとして、小柴大輔著『**一冊で現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本**』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）があります。合わせてご参照ください。

## 予習について

予習（問題にアタック）しましょう。**あえて時間限定せず、じっくり解答してもＯＫです。**

## 復習の仕方について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。

## 授業中のノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

**解法の手順**……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　↓　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり対**比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし選択肢まで読んではダメ。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

**★小説の問6のみ、選択肢まで読んだ方が有益です！**

（3　**本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

**1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK**

4　**本文を冒頭から読む**

**プランA**……設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

**プランB**……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。とくに空欄補充をたくさん出す私立大と異なり、センター国公立大個別試験の場合は、まるまる文章を読ませますから、プランBもあり。

**誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉**

1　対比混乱の誤り　……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**といってもいい。

2　同一性分断の誤り　……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3　正しい対比喪失の誤り　……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4　不当な全称判断　……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5　不当な限定判断　……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6　不当な価値判断　（不当な当為判断（とうい））……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**

……本文中では、「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**

……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なしの誤り**

……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**

……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**

……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**

……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 **具体例は、一段、落ちる**

……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14 **比喩による説明は、一段、落ちる**

……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

# 目次

第一講　随筆　記述編……p.8
第二講　小説　記述編……p.16
第三講　論説「映画論」……p.24
第四講　随筆……p.38

# 第一講　随筆　記述編

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば小学生の子どもたちにとって時間の推移とは、四季折々の気象の変化ではなく学期の切れ目やそこに挿入された休暇の終結によってはっきり認識されると思うのだが、それでも道ばたで遊んでいる彼らが感知するのは、日没が少しずつはやまって影のぐあいが微妙に変化し、私が幼かったころにはほぼ普遍的な尺度であった「五時」というあの不思議な境界線の前後の明暗ではないだろうか。勝ち負けがへんな①しこりを残さず順繰りに動き、最後には誰もが公平さを学ぶことになるような原始的な遊びに興じて時を忘れ、ふと気づくと校庭や公園のラッパ型スピーカーから音楽の流れてくる時刻が一時間ほどはやめられている――そんなとき彼らは、冬の休みが近いことを肌で感じ取るのだ。

ちょっと前まで夜の七時から放映されていたアニメ番組の再放送を見るためあわてて家路につき、夕御飯を食べて湯を浴びたあとは形だけ宿題をこなしてふたたび受像機の前に座り、やがて起きている権利のない九時か十時に差しかかると、自分で決めたわけでもない翌日の時間割をあわせて布団に滑り込む。かつての子どもの日常はそうしたおおらかなリズムで過ぎていったはずなのだが、それが単調だと悩むことなどなかったし、母親にしても外で働いているのでなければ一日の時間の区切りは子どもの生活に合わせてあるのだから、おなじ言葉をおなじ時間に発していてもべつだん不服はなかっただろう。それは正しく引き受けるべきA幸福な単調さと呼ぶべきものであって、運動会や遠足や文化祭や卒業式などの、季節ごとの学校行事の規則性にひそんでいる退屈さにも似た、どこまでも均質な時間なのだった。

反復される変化の間隔が年ごとにみじかくなるのは、双方の、つまり子どもの側と両親の側の加齢によるものだが、平板な日々のリズムを寸断し、子どもの心を静かに揺さぶるような事件は、残念ながらまことに少ない。身近な人の死であるとか、親しかった友だちの転校であるとか、生々しい不安や苦痛を与える出来事は考えられても、なにか奥深いところでうごめく病巣（びょうそう）に比しうるような胎動（たいどう）は、目先を流れていく時間に埋もれて、なかなか見出しづらい。長じてから思い出される幼年期は、B平らかな日々の移りゆきをかならずしも平らかでないと感じていた当時の気持ちに、甘く収斂（しゅうれん）されてしまいがちである。

ところがたったひとつ、これも暦に支配されたものながら、他とは性質の異なる体験がある。春夏秋冬の行事に関係なく定められ、さまざまな特権をいちどきに味わう場。一歳だけ年を重ねるために必要な日付変更線。すなわち、誕生日である。私自身は年のあらたまる中途半端な季節に生をうけたため、いわゆる誕生日会と呼ばれる催しとは縁が薄かったのだが、今春、まだひと桁の年齢を祝う誕生日に少数の《お友だち》を招いたときの娘の興奮ぶりを見て、それがどれほど平常の時の流れから遊離した特殊な事件であるかに、いまさらながら気づかされたのだった。「ほとんど理解できない不思議な経験に最も富んでいるのは、やはり誕生日であった。区別をしないのが人生の常であることは、僕もすでに知ってはいたが、誕生日の朝はやはり楽しい一日を予期しきって起きた」と書いたのは※『マルテの手記』のリルケだが、たしかにその朝は、Cお祭りやクリスマスなどともまるでちがう気圧のなかにひろがっていたのである。

それにしても、すべての日常から外れて、期待と不安に満ちた一日を、私はどのように失っていったのだろうか。誕生日がもたらす新鮮な軋(きし)みを、いつからのっぺりした日々の波に返してしまったのだろうか。娘の様子を見ていて最初に思ったのは、そんな誕生日の喪失であった。夢見ていた特別の一日の崩壊は、自身の失態によってもたらされるのでも、子どもっぽさに突然嫌気がさす時期と連動している成長過程によって生じるのでもなく、いつのまにか訪れたとしか言いようがない地滑りのごときものなのだ。

いや、もしかするとその幕引きは、大人の手によってなされたのかもしれない。「まだ日がさめきらないうちに、部屋のそとで誕生日のケーキがまだとどけられていないと大声で言っているのが聞こえたり、お祝いの品々をテーブルへならべている隣室からなにかこわれる音が聞こえたり」する大人たちの失敗は、「僕たちが子供から大人になる手術」なのだとマルテは書いている。この手術を介して、それまで主役であった子どもたちは、自分を引き立たせてきた大人たちのことを考えはじめるのだろう。誕生日の意義がここで逆転する。子どもは祝われることをやめて、うまく祝わせてやることに②心をくだくようになる。

③そつなく準備された一日。甘やかな期待とその充足は、なにからなにまで大人たちが不都合のないようとりはからってこしらえた筋書きだったのだ。ケーキも、部屋の飾りも、贈り物も。誕生日の消滅はひとつの残酷な秘儀である。時の流れから突き出ていた空間がしなやかに裏返って、気ぜわしい日常に飲み込まれていく。「誕生日を救うことがなによりもの急務である」と詩人はさらに言うだろう。「大人たちから目をはなさずにいて、かれらの失策を未然に防ぎ、すべてをへまなくやっているとい

う大人たちの自信を強めてやることが必要」なのだと。
お膳立てされた空間で、子どもは子どもである無垢な立場から追い落とされ、まがいものの自己をつくりあげなければならない。マルテの記述はたんなる懐かしさの奪回を意味するのではなく、もっと本質的な存在の根を洗い直せと訴える叫びなのだろうが、救いそこねた誕生日のぶんだけ子どもが大人に近づいていくのだとすれば、いつまでたっても大人になった気がしない私はあといくつの誕生日を反古にしたらいいのだろうか。

（堀江敏幸「誕生日について」）

※注
『マルテの手記』＝リルケの小説。一九一〇年刊。デンマーク生まれの青年マルテのパリでの手記の形式をとり、生の不安と孤独をつづっている。

問１　傍線部①～③の語句の意味を説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―一〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問２　傍線部Ａ「幸福な単調さ」とあるが、なぜ単調さが幸福なのか、本文に即して説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問３　傍線部Ｂ「平らかな日々の移りゆきをかならずしも平らかでないと感じていた当時の気持ち」とはどういう気持ちか、説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問4　傍線部C「お祭りやクリスマスなどともまるでちがう」とあるが、どうちがうのか。最も適切に説明しているものを、次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

1　年のあらたまる中途半端な季節の出来事であるという意味でちがう。
2　目先を流れて行く時間に埋もれて、なかなか見出しづらいという意味でちがう。
3　暦に支配されず、平常の時の流れから遊離した特殊な事件であるという意味でちがう。
4　新鮮な軋みをいつのまにか日々ののっぺりとした波に返してしまうという意味でちがう。
5　春夏秋冬の行事に関係なく定められ、さまざまな特権をいちどきに味わう場という意味でちがう。

問5　傍線部D「お膳立てされた空間で、子どもは子どもである無垢な立場から追い落とされ、まがいものの自己をつくりあげなければならない」とは具体的にどういうことか、本文に即して九〇字以内で説明しなさい。

# 知識モノ解説

## 文学史・人物紹介

●筆者　堀江敏幸＝ほりえ　としゆき（一九六四〜）岐阜県生まれ、早稲田大学第一文学部フランス文学専修卒。東京大学大学院人文科学研究科博士課程、パリ第三大学博士課程で学ぶ。『熊の敷石』で芥川賞を受賞した作家であり、早稲田大学教授でもある。入試頻出で、『送り火』はセンター小説で、『煉瓦工場の退屈』は早稲田大文化構想学部（サプリの【早稲田大学対策講座・現代文】第一講に収録）で、『青空の中和のあとで』は東大で、『マルテの手記』に関するエッセイは慶應大文学部（小論文）で登場

## 語句

普遍＝ふへん→いつでもどこでも誰にもあてはまる
尺度＝しゃくど→基準・ものさし
不服＝ふふく→不満があって従えない
平板＝へいばん→単調でおもしろみがない
寸断＝すんだん→ずたずたに断ち切る
病巣＝びょうそう→病気に侵されている部分
胎動＝たいどう→本来はお腹の赤ちゃんが動くこと。転じて、何らかの活動が始まること
うごめく＝蠢く→たくさんの小さなものが動く
長じる＝ちょうじる→成長する
遊離＝ゆうり→かけはなれる

失態＝しったい→笑われるようなぶざまな行動
幕引き＝まくひき→役割が済んだとしてお終いにすること
秘儀＝ひぎ→非公開で行われる儀式
気ぜわしい→心がいそがしい。ゆとりがない
お膳立て＝おぜんだて→食器や料理などの準備を整えること
無垢＝むく→けがれがないこと
まがいもの→本物に似せたつくりもの
奪回＝だっかい→取り戻す
反古＝ほご→すてる・やぶる　反故とも書く

# 復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）状況のスイ移を冷静に見守る　①垂　②推　③睡　④水　⑤衰

（イ）人権は普ヘン的な価値である　①編　②遍　③偏　④辺　⑤片

（ウ）最近の待遇には大変不フクだ　①覆　②副　③複　④復　⑤服

（エ）多様性がなくキン質化している　①均　②筋　③近　④禁　⑤謹

（オ）同じ表現をハン復して使う　①版　②半　③判　④反　⑤範

（カ）新たな社会運動のタイ動を見る　①胎　②体　③耐　④態　⑤待

（キ）発言の根拠が崩カイする　①戒　②怪　③階　④壊　⑤解

（ク）過去の失タイを後悔する　①退　②帯　③態　④滞　⑤怠

（ケ）伝統社会の秘ギを研究する　①犠　②議　③義　④戯　⑤儀

（コ）失われた名誉を奪カイする　①快　②回　③解　④界　⑤会

# 第二講　小説　記述編

次の文章は、横光利一「美しい家」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ある日、私は妻と二人で郊外へ家を見付けに出て行つた。同じ見付けるからには、まだ一度も行つたことのない方面が良いといふ相談になつた。

私達はその日一日歩き廻つた。夕方には、自分達の歩いてゐる所は一体どこなのだらうと思ふほどもう三半器官が疲れてゐた。草に蔽（おお）はれた丘の坂が交錯し合つて穏かな幕のやうに流れてゐた。人家はばうとした草のために見えなかつた。

「おい、こゝはどこだらう。」と私は妻にいつた。

「私もこんな所知らないわ。」

「おれはもう、へとへとだ。」

「私もよ。私、もう歩くのがいやになつた。」

「ぢや、こゝで休まうか。陽が暮たつて、いゝぢやないか。」

「さうね、暮たつて別にかまはないわね。」

「休まう。」

私は草の中へ腰を降ろすと煙草を取り出した。妻も私の横へ座つて落ちついたらしく、暮て行く空の色を眺めてゐた。——

（こゝで、私と妻とが同じやうに疲れたといふことが、①私達一家の間に、大きな悲劇をもたらした原因であつた。）——

しかし、私はたゞ何も知らずに煙草を吹かせてぼんやりとしてゐただけである。このぼんやりとしたゆるんだ心理の続いてゐる空虚な時間に、黙々として私達の運命を動かせてゐた何物かがあつた。それは一体何物であつたのか。私はふと、私のぼんやりしたその空虚な心のなかから、急に、かうしてゐてもはじまらない、今日中に家を見つけなければ、と思ふあわたゞしい気持ちが、泡のやうにぽつかりと浮き上つて来た。

「おい、もう一度家を捜さう。疲れついでだ。今日中に捜してしまつて、それからゆつくり落ちつかうぢやないか。」

「ええ、さうしませう。」と妻はいつた。

疲れてはいけない。疲れると判断力がなくなるものだ。私達は疲れた心でまた家を捜しに出かけていつた。

ある草に包まれた丘の上に、私達は一軒の家を見つけ出した。

「あの家は貸家かな。戸が閉つてゐるね。あれは貸家だよ。」

私と妻とはいきなりその家の周囲をぐる廻つた。

「こゝはいゝね。高いし、庭は広いし、花はあるし、朝起きても日にあたれるし。」

私の言葉の速度が疲れた妻の心を動かした。

「ええ、いいわね、ここにしませうか。」

「ここにしよう、ここがいい。」

そこで二人は大家へ行つて部屋の様子をきき正した。私達はもう家そのものはどうでも良かつた。たゞ自分達の疲れた身体に一時も早く得心を与へるために直ぐその家を借りようといふ気になった。

その家へ越して来たのは、それから一週間もしてからだつた。私はその家が自分の家になつてから、初めて良く家の中を見廻した。すると、私は急に、「いやだ。」と思つた。どうしてこの明るい家の中に、こんな暗さがあるのだらうと考へた。北側に一連の壁があるこれだ。――しかし、私は間もなく周囲の庭に咲き乱れてゐるとりどりの花の色に迷ひ出した。外の色が、内の暗さを征服した。私は北に連らなる頑固な壁を知らずしらずの間に頭の中から忘れ出した。

だが、秋が深くなると、薔薇(ばら)が散つた。菊が枯れた。さうして、枯葉(かれは)の積つた間から、漸(よう)く淋(さび)しげな山茶花(さざんか)がのぞき出すと、北に連らなつた一連の暗い壁が、俄然として勢力をもたげ出した。私はかぜを引き続けた。母が、「アツ」といつたまゝ、死んでしまつた。すると、妻が母に代つて床についた。私の誇つてゐた門から登る花の小路は、氷を買ひに走る道となつた。

「どうも、この家は空気が悪い。古臭い空気がたまるのだ。家を変らう。家を。」

しかし、もうそのときには、妻の身体は絶対に動かすことが出来なかつた。さうして、再び夏が私達の家にめぐつて来た。い

ちごは庭一面に新鮮な色を浮べ出した。桜桃（おうとう）が軒（のき）の垣根に連らなつた。ぶだうは棚の上に房々と実り出した。だが、妻は日日床の中から私にいつた。

「私、こゝの家を変りたい。ね、家をさがしてよ。私、もうこゝは嫌ひ。」
「よしよし、だが、もう少し待て、お前の身体が動けるやうにならなけりや。」
「いやよ。私、もうこれ以上ここにゐれば、死んでしまふにきまつてゐるわ。」
「しかし、動いたなら、なほ死ぬにきまつてゐるんだ。だから、」
「いやいや、私、他で死ぬのならかまはないわ。ここで死ぬのはいや。」

その中に大きな百合が家の周囲で馥郁（ふくいく）とにほひ出した。

「そら、今日は百合が咲いた。」
「どらどら。」

二人が百合の花の大きさに驚いてゐる中に、また、ばらの大輪が咲き初めた。

「おい、今日はばらだ。これは美事だ。」
「まアまア、クリーム色ね、白いのはまだかしら。」

私は百合の花を手折つて来て妻の枕元に差してやつた。すると、妻は激しいにほひのためにせき続けた。

「これやいけない、百合はお前を殺すんだ。薔薇がいゝ、薔薇が。」

百合と薔薇とを取りかへて部屋の暗さを忘れてゐると、次ぎにはおいらん草が白と桃色の雲のやうに、庭の全面に咲き乱れた。

妻の青ざめた顔色は漸く花のためにやはらぎ出した。しかし、やがて、秋風が立ち出した。花花は葉を落す前に、その花を散らすであらう。

ある日、私は、私達をこの家へ導き入れた丘の上へ行つてみた。私は二人で休んだ草の中へ座つてみた。そこで私は、かつて前に、疲れた心をぼんやりとさせたやうに、今また不幸に疲れた心をぼんやりと休めてみた。②私は私の心の中から、何か得がたい感想が浮び出しはしないかと待ちながら。だが、私の胸の中からは、何物もわき上つては来なかつた。私は私の心に詰（つま）つて

ゐるものをふるひ落とすやうに、私の心をたゝいてみた。

「生活とは何か。」

苦しむことだ。――

「苦しみとは何か。」

喜ぶためだ。――

「喜びとは何か。」

生活することだ。

「それなら、生活とは。」――

私は白い草の根をかみながら立ち上つた。ふと、私はその草の根が、去年の秋、私達が座つて踏みつけたときの草の根に相違ないと考へた。それが一度葉を落してまた芽を出した。③私達も廻るであらう。今に、不幸が亡くなるだらう。――

私は家へ帰つて来た。家の小路の両側は桃色の花で埋まつてゐた。この棚びく花の中に病人がゐようとは、④何と新鮮な美しさではないか。と私はつぶやいた。

（河出書房新社版『横光利一全集　第二巻』）

問1　傍線部①とあるが、「大きな悲劇」に至る原因と過程を本文に則してまとめよ。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問2　傍線部②は、小説中のどの部分に対応して記されているのか。本文から抜き出して答えよ。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問3　傍線部③とあるが、なぜ「私」はこのように思ったのか、推察せよ。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問４　傍線部④とあるが、なぜ「私」にとって「新鮮な美しさ」だったのか詳しく説明せよ。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

# 知識モノ解説

## 文学史・人物紹介

●筆者　横光利一＝よこみつ　りいち（一八九八～一九四七）福島県生まれ、早稲田大学中退。ノーベル文学賞を受賞した川端康成とともに「新感覚派」と呼ばれるグループの作家。代表作は『春は馬車に乗って』『日輪（にちりん）』『旅愁（りょしゅう）』。なお、これらは文学史の試験問題になるほど

## 語句

三半器官＝さんはんきかん→内耳にあって平衡感覚をつかさどる部位。現在では「三半規管」と表記する
交錯＝こうさく→入り混じる
空虚＝くうきょ→からっぽで内容がない
得心＝とくしん→十分に承知する。納得
俄然＝がぜん→何かをきっかけにしてそれまでとがらっと違う状況になる様子
桜桃＝おうとう→桜の一種。さくらんぼ
馥郁＝ふくいく→よい香りがする様子

# 復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）都市コウ外へ電車で出かける　①効　②功　③交　④郊　⑤耕

（イ）家族でソウ談してから決断する　①想　②双　③装　④総　⑤相

（ウ）雑多な情報が交サクしている　①作　②索　③策　④搾　⑤錯

（エ）新たな計画にガン固に抵抗する　①願　②頑　③含　④元　⑤丸

（オ）ギリシャのヒ劇を観賞する　①被　②悲　③否　④非　⑤批

（カ）空キョな言辞を繰り返す　①距　②拠　③虚　④居　⑤挙

（キ）先の説明には得シンがいかない　①信　②真　③心　④審　⑤芯

（ク）未踏の大地をセイ服する　①政　②制　③整　④征　⑤勢

（ケ）王が絶タイ的な権力をふるう　①体　②大　③隊　④対　⑤代

（コ）新センな魚介類を仕入れる　①浅　②鮮　③選　④繊　⑤洗

# 第三講　論説「映画論」

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

[*1]小津さんはみずからの初期の作品がアメリカ映画へのただならぬ模倣であることをよく知っており、人間には新しい創造はありえないとする深い絶望を抱きつつ映画を作りつづけていたのである。もっともそれは小津さん固有の原体験というよりも、人間であれば誰しもが避けることのできない、ア<u>物事の始まりという神話のパラドックス</u>であった。

われわれがひとりの個人、ひとつの個体として誕生する以前に、すでにこの世界が存在しているかぎり、新たな創造としての始まりの瞬間を人間は経験することはできない。われわれの肉体は父や母の姿かたちを模倣しているにすぎず、その差異はわずかなものでしかない。表現の主体的な手立てである言葉にしても父や母、あるいは社会の制度によってすでにあるものとして習得したにすぎない。こうした人間のたえざる模倣、反復のありように耐えきれず、個体としてのわれわれ自身に新たな始まりがありえないにもかかわらず、ありうるかのように幻想を抱き、それを聖なる始源のときと考え、みずからによる創造と思い込んでしまうのが、人間の悲しきならわしであった。

だが小津さんはこうした矛盾にいささかも逆らうことなく、始まりのない始まりという絶望を人間に課せられた不可避の条件として受け入れたのである。[*2]トーキー映画としての『一人息子』を作りながら、なおも[*3]サイレント映画の手法にこだわりつづけたのも、映画との出会いを懐かしく追想し、聖なる始源の神話に回帰しようとしたからではなかった。むしろ模倣より始まらざるをえないという絶望をたえず思い起こすための、苦渋にみちた反復にほかならなかっただろう。そして映画の新たな技術、技法を一度は受け入れながら、やがては嫌い、断念するといったことを繰り返すのも、始まりがありえない絶望を回避せずに、たえずそれを生きぬこうとするイ<u>小津さんらしい屈折した戯れ</u>であったのである。

それにしても映画の原体験あるいは原風景とでも言うべきものが、なぜこれほどまでに鮮明にしるしづけられ、癒（いや）されることのない傷痕（きずあと）となってよみがえり、反復されるのだろうか。それは映画の基本的行為である、ウ<u>カメラのレンズをとおしてものを見るという、そのメカニズムのありように小津さんは強い欺瞞（ぎまん）を感じたからに違いない。</u>

カメラのレンズは人間の眼によって覗かれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事実はきびしく相反する関係にあっただろう。人間の眼の機能を、見るという言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニックな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があったのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的に見ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従って人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあっても、それは次の瞬間に新たなる運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じっと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにかを見ているという意識はなく、絵の空間の拡がり、*4タブローの表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的な陶酔はかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけである。

このように人間の生きた眼差しはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるよう

なものであっただろう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかったのである。

同じカメラによる表現でありながら、一枚の【エ】写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、その暴虐ぶりがより鮮明になるに違いない。現実にそこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見るという行為の側に立つならば、写真と絵画はまったく同質のものであっただろう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、おびただしい剰余の眼差しに支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画はそうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディアと言うべきではなかっただろうか。

かつて映画は【オ】時間の芸術という美しい名前で呼ばれた時代があった。しかもそれは時間とスピードに魅せられ、幻惑された二十世紀を象徴する言葉でもあっただろう。映画はそのフィルムのひと齣（こま）、ひと齣が、一秒間に二十四齣という眼にはとまらぬ速度で動くことによって、網膜に残像がしるしづけられ、われわれはそれを連続する映像として見るのである。そのかぎりでは映像のひと齣、ひと齣に加えられた速度、時間を停止してしまえば、映し出されているものは一枚の写真とかわらず、絵のタブローと同様にわれわれの眼が自由にそれを見ることができるはずである。

従って映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存しているのであり、それはフィルムのひと齣、ひと齣の動きのみならず、一時間、あるいは二時間と連続して映写される時間の流れを誰もが疑わず、停止しようとはしなかったからであった。そして息つく間もないスピードの表現であることが、わずか二時間たらずのあいだに人間の一生を描くことができた理由であり、神による天地創造の神話から一億光年の彼方の宇宙の物語まで映画は語りえたのである。

しかしながら映画を見るという行為は、一瞬たりとも休むことのない時間の速度にとらわれ、その奴隷と化することでもあった。静止して動くことのない絵画や写真の場合は、さまざまな視点から自由に眺めながら、みずからの内面でゆっくりと対話することもできるだろう。だが映画は一方通行的に早い速度で流れる時間に圧倒されて、ついにはひとつの意味しか見出せない危険な表現であり、二十世紀の国家権力やコマーシャリズムが濫用し、悪用したのも、こうした映画における見ることの死であっ

たのである。

それにしても小津さんは新たなメディアとしての映画が持ちあわせた特権、その魅力をことごとく否定する、まさしく(カ)反映画の人であったと言うほかはない。カメラのレンズをとおして現実を切り取り、それを映像化することが世界の秩序を乱すと懸念する小津さんであれば、われわれの無用な、無償の眼差しを許そうとしない映画の独占的な支配を受け入れるはずもなかった。ましてや反復とずれによって気づかぬうちに移ろいゆくのが小津さんが感じる時間とその流れであり、二時間たらずの映画の上映で人間の一生が語りつくされたり、一億光年の宇宙の果てまで旅するような時間の超スピードぶりは、われわれの眼を欺くまやかしでしかなかった。

（吉田喜重『小津安二郎の反映画』による）

注

＊1　小津さん＝小津安二郎。日本を代表する映画監督。（一九〇三～一九六三）
＊2　トーキー映画＝音声を伴う映画。
＊3　サイレント映画＝音声を伴わない映画。
＊4　タブロー＝完成された絵画作品のこと。

問1　傍線ア「物事の始まりという神話のパラドックス」とはどのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、人間には新しい創造はありえないとする深い絶望を抱きながらも、それでもなおアメリカ映画への模倣によって映画を作りつづけなければならないと考えること。

b　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないにもかかわらず、新たな創造がありうると思い込み、それを聖なる始源のときとすること。

c　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないことを理解しながらも、無理にでも新しい創造をめざそうとすること。

d　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、両親や社会的な制度によって既存のものを模倣し、習得するにすぎないことに耐え切れずに、みずからの創造を始めようとしてしまうこと。

e　ひとりの人間が、ひとりの個人、ひとつの個体として、この世に誕生する以前から、世界はすでに存在しているわけであり、人間には新しい創造はありえないということを理解しながらも、アメリカ映画への模倣による映画作りが創造そのものだとする幻想をもつこと。

問2　傍線イ「小津さんらしい屈折した戯れ」とは、どのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　小津安二郎は、アメリカ映画はもはや時代遅れになっていると思いながらも、自分の映画との出会いを懐かしく追想して、新たな技術や技法を取り入れることにためらいを見せ、古いサイレント映画の手法にこだわりつづけ、その立場に生き抜いたということ。

b　小津安二郎は、アメリカ映画はもはや時代遅れになっていると思いながらも、自分の映画との出会いを懐かしく追想して、新たな技術や技法を取り入れることにためらいを見せ、模倣こそが安定した映画作りの道だと信じて、一貫して模倣に終始しながら映画を作りつづけたということ。

c　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を取り入れることがあっても、しばらくするとそこから逃れて、つねに古い手法に回帰するということを繰り返したということ。

d　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を取り入れることもあるが、しばらくするとそれに疑問を持つようになるものの、結局古い手法に回帰することなくトーキー映画を作りつづけたということ。

e　小津安二郎は、始まりのない始まりという人間の絶望を抱きながらも、映画作りは模倣から始まらざるをえないという思いから、新たな技術や技法を積極的に取り入れると同時に、なおかつ自分と映画との最初の出会いを懐かしく追想しつづけたということ。

問３　傍線ウ「カメラのレンズをとおしてものを見るという、そのメカニズムのありように小津さんは強い欺瞞(ぎまん)を感じたからに違いない」について、小津安二郎が感じた強い欺瞞とはどのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、視線を非連続なものに抑圧して、現実の世界から目を背けるようにしむけ、見るという行為に死をもたらすように強いること。

ｂ　人間の視線が一瞬たりとも運動を停止せず、非連続の状態にとどまることがないのと同様、カメラのレンズも監督の指示に従って動き、機能しているときは、人間の目と同じ働きをするが、機能を止めるとたちまち、見ることの死をもたらしてしまうこと。

ｃ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、おびただしい剰余の眼によって、限りなく拡がる世界の空間を描き出すにもかかわらず、人間の目と同等の働きをしていると思い込ませること。

ｄ　人間の視線が一瞬たりとも運動を停止せず、非連続の状態にとどまることがないのと同様、カメラのレンズも監督の指示に従って動き、機能しているときは、人間の目と同じ働きをすると思われていることから、人間の目の働きの独自性を否定するように強いること。

ｅ　人間の目が事物や出来事を連続する総体として見ているのに対して、カメラのレンズはこうした人間の目の動きを否定し、ひとつの視点にのみ集中するように抑圧しているにもかかわらず、人間の目と同等の働きをしていると思い込ませること。

問４　傍線エ「写真と映画」について、どのような違いがあるというのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、きわめて多様な眼差しを許容するのに対して、映画はあくまでも特定の視点を強要し、観客の眼差しを制限するという違いがある。

ｂ　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画とは異なる性質を有しているのに対して、映画のほうがタブローとしての映像という点で絵画と共通性をもっているという違いがある。

ｃ　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、特定の被写体を固定的に選ぶものであるのに対して、映画は動画としてたえず動き続ける自由さをもっているという違いがある。

ｄ　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、人間の眼の無用な動きを否定するのに対して、映画は動画としてたえず動き続ける自由さをもっているという違いがある。

ｅ　写真も映画も同じカメラによる表現であり、ともに複製芸術であるが、見るという立場に立つと、写真はむしろ絵画と同質で、特定の被写体を固定的に選ぶものであるのに対して、映画は無数の被写体を自由にとらえることができるという違いがある。

問５　傍線オ「時間の芸術」と呼ばれる映画は、どのようなものと考えられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

ａ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、時間とスピードに魅せられた二十世紀にふさわしい芸術だったが、二十一世紀になると国家権力やコマーシャリズムに悪用され、むしろ時間の速度の奴隷と化したものと考えられている。

ｂ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、ひと齣ごとに速度や時間を停止させることを通じて、一枚の写真や絵のタブローとかわらない、静止した画像として自由に見ることができるものと考えられている。

ｃ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、まさにこの速度によって成立する芸術であり、わずかの時間のうちに、人間の一生を描き、また過去の話も未来の物語も語ることができるものと考えられている。

ｄ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、ひと齣ずつ切り離して見たときは静止した写真や絵のタブローとなんらかわらず、じつはそのスピードに幻惑されていただけであったと自覚されるようになったと考えられている。

ｅ　一秒間に二十四齣という速さで動くことによって、連続する映像として写し出す映画は、じつは網膜の残像としてあたかも動いているかのように思わせる芸術であり、人間の錯覚をうまく利用しただけの、いわば危険な表現というべきものと考えられている。

問６　傍線カ「反映画の人」について、小津安二郎が「反映画の人」であったというのはどういうことか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

## 知識モノ解説

### 文学史・人物紹介

●筆者　吉田喜重＝よしだ　よししげ（一九三三〜）福井県生まれ。東京大学文学部仏文科卒。映画監督。本書『小津安二郎の反映画』は一九九九年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。センター試験でも登場。サプリの【センター現代文対策講座】第六講に収録

●小津安二郎＝おづ　やすじろう（一九〇三〜一九六三）東京深川生まれ。三重県立第四中学校（旧制）卒。戦前から戦後にかけての日本を代表する映画監督。代表作『東京物語』（一九五三年）。この作品は、十年ごとに行われている、世界の映画監督が投票で選ぶ「世界の映画史上ベストテン」にて、二〇一二年、世界一位の評価を得た

### 語句

神話＝しんわ→ギリシャ神話のような神様の物語。多くの人に信じられてきたけれど今では説得力を欠くことがら。本文は後者の意味

パラドックス→逆説・矛盾

主体的＝しゅたいてき→自分自身の意志で行為する様子

手立て＝てだて→具体的な方法・手段

不可避＝ふかひ→さけることができない　cf「不可欠（ふかけつ）」→かかすことのできない

追想＝ついそう→過ぎ去った日のことを思い出すこと　類義語「追慕（ついぼ）」「追懐（ついかい）」

苦渋＝くじゅう→物事がうまく運ばない苦悩　cf「苦汁」はつらい経験の意味で「苦汁をなめる」などと使う

メカニズム↓仕組み・機構・からくり
欺瞞＝ぎまん↓ごまかし・ウソ
総体＝そうたい↓全体像・トータルなもの
休止符＝きゅうしふ↓一時停止のしるし
忘我＝ぼうが↓我を忘れる状態・トランス
無償＝むしょう↓なんのためでもない　対義語「有償」
おびただしい＝夥しい↓非常にたくさん
剰余＝じょうよ↓ありあまるほどたくさん
抑圧＝よくあつ↓行動や欲望を押さえつける
暴虐＝ぼうぎゃく↓けた外れの乱暴
懸念＝けねん↓心配する・危惧（きぐ）する

# 復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）創造は模ホウから始まる　①放　②報　③倣　④法　⑤封

（イ）各自がコ有の個性を発揮する　①個　②固　③弧　④孤　⑤粉

（ウ）両者の衝突は不可ヒである　①飛　②否　③避　④悲　⑤誹

（エ）難題に苦ジュウの表情を浮かべる　①汁　②渋　③重　④獣　⑤従

（オ）過去の論点に回キしてしまう　①軌　②着　③来　④帰　⑤奇

（カ）対立点を鮮メイにして議論する　①明　②名　③銘　④命　⑤盟

（キ）微粒子が空間に浮ユウする　①悠　②郵　③遊　④融　⑤誘

（ク）魅惑的な作品にトウ酔する　①陶　②透　③盗　④倒　⑤頭

（ケ）異質な考え方をハイ除する　①廃　②灰　③敗　④配　⑤排

（コ）残酷にボウ虐のかぎりを尽くす　①妨　②棒　③暴　④冒　⑤膨

# 第四講　随筆

次の文章を読み、後の問に答えよ。

人間は余り長期にわたって患うていると、飽かれて邪魔者にされるものだ。私の義父は七年間病床にいるあいだ、継母（ままはは）から粗末な扱いを受けて亡くなった。義父が小用のために母親を呼び、母親は春先のことで外出していて、家の中で彼女を呼ぶ義父の声が、外は［ 1 ］であるのに私の耳に悲しくひびいた。

ある出入りしていた大工さんで腕のよい男があった。妻は永い間の糖尿病がもう眼に来ている程わずらっていたが、それでも手捜（てさぐ）りで飯を焚いて亭主を仕事に出していた。しまいには[2]勝手に這うて行ってお菜をこしらえていたが、大工さんは入院とか医療の思いやりをしてやらなかった。そういう余裕もなかったのであろうが、私はその大工さんの顔をみると女房さんは大事にしてやれと繰言をした。大工さん自身も酷い喘息（ぜんそく）持ちでお医者は夜中に電話がかかって来れば、大工さんの喘息が起ったのだと決めていたくらいであった。この二人の人間は前後して亡くなったが、どちらもお互に看護されずに一人ずつ孤独で窮死して行った。

ある鳶職（とびしょく）の人がたまに私の家に仕事に来て、家内がまた病気しているが今度こそだめだろうと言い、こんどこそ自分で片をつけてくれなければ困るとこぼし、一年経った後にまた来て今度こそと思っていたが、恢復して動き出したと言い絶望の面持（おももち）だった。生きる人間が生きるために、相手の死の早いことを願っているのである。（中略）

私と妻のあいだでは、妻は何時も先に亡くなればいいんですがねと言い、あなたが先だと後の事が大変ですからといった。それは何でもない時の、そういう話が出て来なくても宜い折にぽっそりと、[3]印章を捺（お）すように一年に二度くらい出てきたのである。私はどちらが先になり後になるにしても、死ねばきっと後々は巧（うま）くゆくものだ、年齢から言えば私が先に廻ることになる。第一この頭に不相応な仕事の無理が怖い、きみはそうして病気と対決しているから守られていて、[4]網の目の中にいるが、私は自分で気を付けていても野放しのところがある。気を付けている時間に較べると、途方もないところに隙間があるから、持って行かれる率が多いというふうに言い、妻は結局後にのこるということに無理がないように思うていた。そしてその様な折に[5]妻

はあたたかい微笑をうかべ、私はそれを生きぬく人の嬉しさだという解釈の下で見ていた。大工さんの話や鳶職の人の話はそういう雑話の中の人物であって、私に慄然として恐怖をさそい込む程ではなかった。（中略）

私は女の人の事でぼろを出したためしは、一度もなかった。ぼろがあれば匿さなければならないし、匿し終せないようなぼろなら、始めから下げていた方がよかった。女の人からの手紙は一応私が読み、そして妻に読んで貰い、その人が訪ねてくれば手紙の主であることを判るようにしていた。夜は一さい外出をしない習慣のある私であり、昼間は娘が蹤いて来るくせのついた私には、信を置く点では完璧のものだった。その信を壊すということは愚かさも極まった者である。ただ、やはり[6]私の始終気にしていたことは大工さんや鳶職の人のことであり、この人達が病妻への酷たらしい思いは、この人達ばかりが持っていた残忍さであったかということになれば、それはこの人達だけが抱いている考えでないことが言えるのだ。その中に私も当然編入されてよい薄情と残酷とを包み匿せないと白状した方が、純粋であるように思われる。彼らは必要と欲望に迫られていたが、私にはその残酷な凝念の必要がなかったのだ。何をするにも妻ウメ子は邪魔者にならなかった事である。何でも許し何にも信を置いている倖せな人には、殆ど私は感謝され通しであってその為に却って私は赤面したくらいであった。この人もおお方多病だから死ぬであろう、早く死ぬか遅く亡くなるかの問題にぶつかると、私はその考えを考えることを打拋っていたくらいである。そこに大工さんや鳶職の人の考えを見出すたびに、私はその考えに近づいてはならない、近づくだけでも大工さんや鳶職の人の考えと一緒になることを怖れていたのである。

人間の永い生涯には妻が先に死んでくれた方がいいと、ちょっとでも考えない人があっただろうか、その夫が若し先に亡くなったら、ああしよう、こうしようと死後の策を考えない婦人があっただろうか、折々確りした眼付と身構えを持って見合せた眼こそは、たしかに今まで生きて来た［７］を講じかかる、退っぴきならない眼付だったのである。どちらかが生きのこった時には、先ず後始末をしなければならないのである。

人間につきものである晩年の悲劇は、二人とも半ば老いた時に開始され、間もなくその一幕は終る。それも三、四年も経てば忘れまいとしても忘れて了う。自分自身も詩も恋愛もないところ、何も見えて来ないところ、何も考える事さえ出来ない所に追い出されるのだから。たとえ夫婦同体であっても其処まで行けばばらばらになって死なければならない、老いて生きのこった一人は、日向ぼっこをして欠伸をしながら呟く、あの人は一体何処に往ったのだろう、あんな笑い顔はどうなったのであろうと、

美しい物が滅びた後は、[8]もっと美しい物が見えてくる時を待機するようになるのである。

（室生犀星『生きたきものを』より）

問1　空欄1に入るもっとも適切な一字の語を、文中から探して答えよ。

問2　傍線部2「勝手」を、別の二字の語で言い換えよ。

問3　傍線部3「印章を捺すように」とはどのような意味だと考えられるか。もっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　はっきりした契約を結ぶように　　ロ　それとなく確認しておくように
ハ　不意打ちで選択を迫るように　　ニ　冷たい事務的な調子で
ホ　どうでもいいような投げやりな調子で　　ヘ　子どものように無邪気な調子で

問4　傍線部4「網の目」と対比的に用いられている二字の語を、文中から探して答えよ。

問5　傍線部5「妻はあたたかい微笑をうかべ、私はそれを生きぬく人の嬉しさだという解釈の下で見ていた」という場面では、妻と「私」はそれぞれに相手をいたわりつつ、互いの心の奥底にあるものを見ない（あるいは見せない）ようにしているように見える。この個所と対照的な場面がこれより後の文中にあるが、その中で「あたたかい微笑」と対比的に用いられている表現を探して、十字以内で書け。

問6　傍線部6「私の始終気にしていたことは大工さんや鳶職の人のことであり」の箇所で、なぜ「私」は彼らのことが気になるのか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えよ。

イ　病妻の面倒も見られない彼らの貧しい暮らしぶりが身に迫ってくるので
ロ　彼らに酷く扱われる妻たちが哀れに思えてならないので
ハ　彼らのように妻の信を壊すのはあまりにも愚かだと思えるので
ニ　自分も彼らと同じような残酷な思いを持っていることが意識されるので
ホ　人間というものは薄情を隠そうとしても隠しきれないので
ヘ　彼らのことを思えば自分も少しくらい妻の信を壊してもいいかと思えてくるので

問7　空欄7に入るもっとも適切な語を次から選んで、記号で答えよ。

イ　改善策　　ロ　対抗策　　ハ　防御策　　ニ　懐柔策　　ホ　善後策　　ヘ　次善の策

問8　傍線部8「もっと美しい物」とは、どのようなものだと考えられるか。六字以内で答えよ。

問9　この文章全体に題をつけるとすれば、どのような題がふさわしいと思うか。もっとも適切なものを次から選んで、記号で答えよ。

イ　生と死　　ロ　あととさき　　ハ　妻とわたし
ニ　やまいと老い　　ホ　夢とうつつ　　ヘ　大工と鳶職

# 知識モノ解説

## 文学史・人物紹介

●筆者　室生犀星＝むろう　さいせい（一八八九～一九六二）石川県金沢生まれ。金沢高等小学校中退。詩人。小説家。代表作『幼年時代』（センター小説で出題）『性に目覚める頃』。故郷を詠んだ詩として「ふるさとは遠きにありて思ふもの　そして悲しくうたふもの」が有名

## 語句

繰言＝くりごと→何度も飽きずに言うこと。愚痴（ぐち）をこぼすという意味もある

窮死＝きゅうし→病気や生活難で苦しんで死ぬこと

鳶職＝とびしょく→建築現場で、建物の組み立てなどを行う職

恢復＝かいふく→ケガや病気からもとの健康状態にもどること。回復とも書く

不相応＝ふそうおう→自分の力量にふさわしくない

慄然＝りつぜん→おそろしさにぞっとする　関連語「戦慄（せんりつ）」→ふるえあがること

倖せ＝しあわせ→基本的には「幸せ」と同じ。あえて「倖」の意味を強調するなら、思いがけないしあわせのこと。
熟語なら「僥倖（ぎょうこう）」

退ぴきならない＝のっぴきならない→引くにひけない・どうしても動きが取れない

# 復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）邪マ者の侵入を瀬戸際で防ぐ　①魔　②間　③摩　④磨　⑤麻
（イ）資金の余ユウがなくなる　①憂　②裕　③勇　④融　⑤雄
（ウ）臨床でのカン護の仕事に就く　①患　②環　③監　④看　⑤寛
（エ）能力に不相オウな職を辞する　①王　②応　③央　④往　⑤横
（オ）残ニンな仕打ちに抵抗する　①認　②妊　③任　④人　⑤忍
（カ）犯行の理由を白ジョウする　①情　②譲　③状　④浄　⑤剰
（キ）自宅で待キするよう命じる　①起　②期　③機　④基　⑤企
（ク）詩人のジュン粋さに感動する　①潤　②純　③準　④殉　⑤順
（ケ）温暖な地方でバン年を過ごす　①盤　②坂　③伴　④蛮　⑤晩
（コ）構造がソ末で家が倒壊する　①疎　②阻　③素　④租　⑤粗

# 模範解答

# 第一講　模範解答

問１　①　事後も残るわだかまり　②　相手を気づかうこと　③　不注意や無駄がないこと

問２　かつての子どもの日常にある規則性やおおらかなリズムの中にあるため、同じ言葉を同じ時間に発する繰り返しがあっても不服とはならないから。

問３　平板な日々のリズムを寸断し子どもの心を揺さぶる事件は少なかったが、学期の切れ目や休暇の終結によって時間の推移ははっきり認識するような気持ち。

問４　５

問５　子どもが大人に近づいていくとき、誕生日で祝われる主役であることをやめて、自分を引き立たせてきた大人たちのことを考えて、彼らにうまく祝わせてやるような逆転があるということ。

# 第二講　模範解答

問1　その日中に家を見つけなければとのあわただしい気持ちから、判断力を欠くのに夫婦とも疲れたまま家を捜し、決めてしまった。

問2　私はふと、私のぼんやりしたその空虚な心のなかから、急に、かうしてゐてもはじまらない、今日中に家を見つけなければ、と思ふあわたゞしい気持ちが、泡のやうにぽつかりと浮き上つて来た。

問3　昨年の秋からの時間や季節の推移を考えれば、今は不幸に疲れた自分たち夫婦の生活も変わるだろうという期待や願いがあるから。

問4　季節の色とりどりの花に囲まれた家に病で床に伏せる妻がいることは一年前に家を捜し決めたときには考えもしなかったことだということ。

# 第三講　模範解答

問1　b

問2　c

問3　e

問4　a

問5　c

問6　無用で無償の眼差しを許さず時間の制限もある映画の独占的な支配を受け入れない映画を作ろうとしたこと。

# 第四講　模範解答

問1　春

問2　台所

問3　ロ

問4　隙間

問5　退ぴきならない眼付

問6　ニ

問7　ホ

問8　生前の思い出

問9　イ

# 復習問題　模範解答

# 復習問題　第一講　模範解答

（ア）②　（イ）②　（ウ）⑤　（エ）①　（オ）④
（カ）①　（キ）④　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）推移　（イ）普遍　（ウ）不服　（エ）均質　（オ）反復
（カ）胎動　（キ）崩壊　（ク）失態　（ケ）秘儀　（コ）奪回

# 復習問題　第二講　模範解答

（ア）④　（イ）⑤　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）②
（カ）③　（キ）③　（ク）④　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）郊外　（イ）相談　（ウ）交錯　（エ）頑固　（オ）悲劇
（カ）空虚　（キ）得心　（ク）征服　（ケ）絶対　（コ）新鮮

# 復習問題　第三講　模範解答

（ア）③　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）④
（カ）①　（キ）③　（ク）①　（ケ）⑤　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）模倣　（イ）固有　（ウ）不可避　（エ）苦渋　（オ）回帰
（カ）鮮明　（キ）浮遊　（ク）陶酔　（ケ）排除　（コ）暴虐

# 復習問題　第四講　模範解答

（ア）①　（イ）②　（ウ）④　（エ）②　（オ）⑤
（カ）③　（キ）③　（ク）②　（ケ）⑤　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）邪魔者　（イ）余裕　（ウ）看護　（エ）不相応　（オ）残忍
（カ）白状　（キ）待機　（ク）純粋　（ケ）晩年　（コ）粗末

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。